



第四十三回 スノーデンと
『Brothers - A Tale of Two Sons』

考



え

コントローラがふるわせる
両手 と 心

弦楽器イルカ  ⇔ 友人

久しぶりだね。

今、ミャンマーのヤンゴンにいて、この後、バンコク、ホーチミン、プノンペンと滞在する予定。

その前にはソウルと釜山にいて、一度帰国したら、予定では、フィリピンとオーストラリアとニュージーランドに行くつもり。

変な仕事でしょ。

それにしてもミャンマーのヤンゴンは暑い。

今日4月10日の最高気温は38度だったよ。

そんな暑い中散歩（と商品のテスト）をしていたら、合気道の道場を見かけたよ。遠くからみてたら、ミャンマー人の師範らしき人に日本語で話しかけられて、いろいろと中で話を聞いたよ。

日本の精神は素晴らしいからぜひとも子供たちに教えていきたいって。

台湾でもそういう老人やおっさん、若者もたくさんいたけどね。

「教育勅語を知っているか？」とか逆質問されたもんだよ。

左派の人たちに逆に聞きたいのだけれども、台湾やビルマにかぎらず、マレー半島やフィリピン、太平洋の国々にとって、イギリスやフランスなどに侵略され、奴隷のように扱われて、力では到底かなわない状況で、力でねじ伏せられていた歴史をどう思っているのか？

それを大東亜共栄圏を築いて、打開していくことを目指した日本は、本当に間違っていたのか？

そこのところの認識の違いが、今の右派と左派の対立を生んでいる気がするよ。

もちろん、個々の人権は大事だし、権力は得てして、多数派にとって都合がよいように動きがちだから、憲法などをしっかり守らなければいけないけれど、少数派であることや権利を振りかざして異常なところまできていた左派に対する反発が今の右傾化する日本だと思うけどね。

あとは、最近、スノーデンを扱った本を読んだよ。

スノーデンは本当に聡明な若者だよ（暴露した当時は29歳）。

NSAやCIAで働きながら、日本を含めて外国でスパイ活動みたいな仕事をして、このままではヤバイって思って、人生を投げうって、香港ですべてを暴露したんだ。

彼が明らかにしたのは、米国政府は、ベライゾンやAT&Tなどの通信会社のログは自由に入手できるし、マイクロソフト、アップル、スカイプなどと秘密の契約を結んで、自由にユーザーを追跡できる。遠隔地でPCやスマホを乗っ取り、盗聴器としても使えるようになっていたらしいよ。

NSAやCIAのサーバーにアクセスして、極秘資料を入手し、まとめて、証拠を明らかにした。詳

しくはわからないけど、証拠のもっともらしさから、実際にそういう状況になっていたと思う。

まさに、オーウェルの小説のような世界になってしまったということだね。

中国政府のグレートファイヤーウォールを非難する前に、アメリカの盗聴システムこそ非難されなければいけないよ。

まだ頭の中で整理できていないけれど、もう少しこの現実世界について考えてみたいと思います。

じゃあ、またね。



Uの返信から遅くなってごめんね。今はどの辺りかな？

今回は俺の枕がちょっと長めだから、暑苦しい抱き枕だと諦めてください。

まず、前回書きたくて入りきらなかったんだけど、『この世界の片隅に』の原作者があとがきで、「死が最悪の不幸であるのかどうかわかりません」って書いてて、俺も「生=正」「死=負」って単純化はできないと思ってる。

実際あの作品は戦時中の生き死にをリアルに描きつつも、割と重要な展開をファンタジーに託したり、生死もぼやかしたりしてた。

それは緊張の緩和って意味合いだけではなくて、生きるも死ぬも、妄想も現実も、一人の人間から見えている世界はすべて等価であるって事実を物語っているんだと思う。

もちろん、客観的な歴史年表には正確な日時が表記されるでしょう。ただ、今を生き感じているのは、自分の主観だけだ。だから主観的な現実にとっては妄想も不可分な一部だし、死んじゃった人もただこの世にいないというだけで、記憶の中で生きていれば繋がれる瞬間がある。主観的な自己にとって、客観的な事実だけが絶対じゃない。

「そうして私たちは、死んでも生きていくんだ」ってメッセージもあると思ったよ。

んで、前に書いたSTEAMの『Brothers - A Tale of Two Sons』ってゲームをUに薦めたい。PS4でもあるみたいだけど。

海外の映画監督が制作した作品で、クリアだけなら割と簡単だから、ゲームでしか体験できない新しい「ゲーム表現」を楽しみたい人にだけお薦めするよ。『アウター・ワールド』と『ICO』を合わせたような、けっこうキテレツで笑える要素も随所にあるゲームだから、たぶんUにもストライクだと思うんだよね。

でもクリアしてから知ったんだけど、監督は内戦下のレバノンに生まれて、幼少期には、出生後すぐ亡くなった弟を自ら急ごしらえで掘った墓に埋めなければならなかったり、他にも戦地で生き残るために子供がすべきでない「悪い」行為もいろいろしてるみたい。

『ICO』でも右手の握手ボタンに血が通う瞬間があったと思うけど、この作品もボタンに文化が宿る瞬間がある。これは鑑賞だけのメディアでは絶対にできない体験だ。人に言葉を伝える意味や、俺らがウマシカなりに書く理由もここら辺にある気がした。

生物は遺伝子の乗り物かもしれないけど、ヒトはむしろ言葉を繋いでいく生物なんだと思う。単に生き延びるためだけでなく、生きる個体としての喜びを得るためにもね。

ちなみに、出来るだけネタバレなしでウマシカコピーを考えた。

「握りしめた両手が 僕らの生きる証」

この国の中で平和ボケしてる俺にはちょうどよかった。

STEAMって無料でインストールできるし、ソフトをウォッチリストに入れるとびっくりするくらい安いセール通知が来たりするから、忙しいだろうけど是非機会を見つけてください。

では以下、Uの手紙に返信するよ。

一般論として、第二次世界大戦の時代までは、戦争で国民の命を犠牲にしてでも国富を拡大するって考え方は一般的だったでしょう。ただ、第二次世界大戦であまりに戦線が拡大し人が死に過ぎた反省を踏まえた先進国は、戦争を第三世界に押し込めていったんでしょう。

水木しげるを持ち出すまでもなく、この国のたくさんの兵隊が前線に送り込まれて餓死したとか、沖縄では女子供も集団自決させられたとかの一方で、この国の兵隊に助けられたと思う人々もいる。

また、戦争で何を指そうとしたのかは、それぞれ立場によって全く違う話でしょう。たとえば宮崎駿の『風立ちぬ』は、戦争でただ美しい戦闘機を作りたかった人の話だ。

人殺しなんてしたくないって人もたくさんいたと思うし、家族のため、御国のため、世界平和のためにはやむを得ずって人もいたかもしれない。他にも単に自分の富を拡大したいとか、出世したいとか、いろんな思惑で戦争に加担したり巻き込まれた人々がいたはずだよ。

Uだって百も承知だろうけど、それらの事実を美化するのも、卑下するのも、どちらも公平じゃないし、嘘偽りだ。

もちろん、それら大きな時代の流れに対して、どういう選択肢があったのか、自分だったらどうしたかを考えて表現はできるでしょう。

でも個人の選択には正解も誤りもない。もしそこで決められない正誤を無理やり決めようとするれば、それは嘘偽りにしかならない

そして客観的に誤った数字や記録を使って不公平な意見を述べるのも、嘘偽りだ。

Uが言う左右の争いの多くは、その嘘偽りの上に成り立ってるんじゃないかな。

左右それぞれが持つイデオロギーは、簡単に思考停止する。宗教と一緒にイデオロギーも、永遠に聖戦を続けるための大義名分となる。

つまり右派も左派もやりたいのは進歩的な歩み寄りのための争いではなく、単なる利権プロレスだろう。

ここで意図的に脱線。

もし今、特撮に出てくるような悪の怪人がUを襲ったら、絶対に正義の仮面ヒーローが助けに来てくれる。これは間違いない真理だ。

でも幸か不幸か、現実には悪の怪人は絶対出て来ない。特にこの国の路上だと出て来るのはせいぜい「怪しい人」とその露出された下半身くらいだ。そこに仮面ヒーロー参上！しても、着ぐるみ仮面と局部露出の人、不審者二人が道端に立ってるだけで、現実的な解にはならない。

「怪しい人」から市民を守るのは「警察」であって仮面ヒーローではない。現実には仮面ヒーローどころか、警官一人でも動いてくれたらまだマシっていう、厳しい現実もある。

つまり、「現実には悪の怪人は絶対出て来ない」という大前提が崩れてしまったら、あとは仮面ヒーローでも悪の大総統でも、出たい放題ってことだ。これを俺は「ライダー理論」と呼ん

でる。

(ちなみにこのライダー理論を応用すると、俺が本気で面白いと思う文章を表わせたら、俺と似た境遇の人々にもちゃんと面白く刺さるって結論にもなる)

いつもこんなばっか考えてる俺だけど、原発にもこの「ライダー理論」は当てはまるだろう。

「絶対安全」な原発で「科学的にはありえない」事故が起こり大前提が崩れた以上、「科学的には絶対安全」ってその後の説得は、科学的にはむしろ「非科学」だ。原発ってパンドラの箱から魑魅魍魎が現れても、国語としてはなんらおかしくない。

だからこそ、自分の身は自分で守るしかない。

そして米の新大統領も、本物のプロレス界から出て来た人だ。「政治はプロレスじゃない」なんてキレイごとの大前提は、とうの昔から崩れてると俺は思う。

各国の愛国は利権プロレスとしてコントロールされてる。もちろん当人同士はそこそこ本気かもしれないが、コントロールしやすい話題で争って本質から目を反らす戦法は、各国間の争いでも、国内左右の争いでも共通してる。

たとえばこの国では、議員定数の削減とか、政党交付金の廃止とか、某J隊員や現場作業員の待遇改善とか小児甲状腺ガンの多発とかは議論にならないし、今は北の脅威を最大限に煽ったほうが、右派にとって都合が良いという構造もある。

脅威を煽りすぎかどうかは別の議論としても、構造がある事実は否定できない。

愛国♥学園問題で内閣の支持率が大きく下がらないのも、そもそもコネ利権や不正があって当たり前だって国民の多くが思ってるからだ。

大なり小なり談合はある。むしろコネ利権が一切ないって社会のほうに、国民は驚くだろう。天下りゼロなんてこの国じゃ逆にファンタジーだから。

極論すれば内閣を支持してる人は、なんなら自分も談合に参加しちゃってる側だろう。

Uの言ってる「マイノリティの権利が異常かどうか」は、個々人で評価が分かれるから無評の評だと俺は思う。

ただ、誰もが自己の痛みを主張するべきだし、それに対して個人や組織はできることとできないことを線引きして主張し、両者がオープンに交渉するのが公平な社会だと俺は思う。

俺も前に書いたけど、米の新大統領は頭ごなしに非難できないし、米国民に選ばれただけの理由はあるはずだ。そしてそれはUが言うように左右のバランスを調整し直したいとか、長く続いた米露の冷戦構造にこびりついた利権や紛争を打破して、新しい世界秩序に平和を求めたんだと思う。

そういう事実を一つ一つ冷静に考えることで、公平な解に近づくんじゃないのかな。

今後、ウマシカなりに考える世界プロレスのシナリオだと、表向き米中露は小競り合いを続けながら、北に対応するためこれまで以上に関係性を強化していく。

そしてこの三大国間の距離が近づけば近づくほど、北は存在意義を失い、韓と共に中露に取り込まれていく。

米・中・露・欧などが連携して、それぞれの地域を安定化させ、世界経済を発展させようとする流れの中で、この国は上記に属さない東亜を安定化させるシナリオで動いていくのかもしれない。

この国が竜を保有するかどうか、大国の竜の傘にいつまで頼るのかといった議論は今後もされていくんじゃないのかな。ウマシカ的には。

ついでにこの国の人口減少を移民で補うのであれば、いっそ全員タイガー・ウッズとかダルビッシュみたいになればいいのにね。和洋折衷のハイブリッドな国民性にも合ってるし。ゴルフや野球だけじゃなく、それでサッカーも強くなったらUも応援しがいあるじゃん？

この国が緩やかにそうならいけば、文化的にもアグレッシブで、性的にもモンスター男子が人口減少を食い止める強い国になるんじゃないのかな。

最後に、スノーデンの話は面白いし、実際その通りだと思う。海外の話は相変わらず羨ましいね。

今回はこんな感じ。この手の話題はこれでだいぶ書き切ったかな。次あたりから新しい連載ができるといいな。

どうかな？



考えるウマシカ～第四十三回 スノーデンと『Brothers - A Tale of Two Sons』

～

<http://p.booklog.jp/book/114569>

著者：弦楽器イルカ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/gengakkiiruka/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/114569>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト